

## 尊すぎる天使2 —サンプル—

1

「斗真くん。おはよう。朝だよ」

「んう……んう……やあ……」

「ふふ、まだおねむだね」

入岡が穏やかに笑いながら身を起こした。おいでいかれることはないと頭ではわかっているものの、つい不安になり目をこする。

「んう……おはよ……」

挨拶を返すと、入岡の手が斗真の下腹部に触れた。

「あっ……」

一気に覚醒する。緊張で勝手に身が固くなった。

「大丈夫。ね。怖くないよ」

入岡が布団にもぐり、斗真のオムツに顔を埋めた。恥ずかしさより、不安。本当に大丈夫だろうか。

「——うん、今日もおねしよなし」

「あ……」

体から一気に力が抜けた。よかった。もう何日もおねしよはしていないとわかっているけれど——わかってはいるからこそ、今日も大丈夫だろうかと怖くなる。

「順調順調」

「へへ」

入岡が退職してしばらくは退職させた申し訳なさとプレッシャーがストレスになったのか、せっかく思い出した尿意が遠ざかったり、我慢しているつもりが出てしまったり…ということを繰り返していた。

けれど入岡の優しく根気強いトイレトレーニングとたっぷりの愛情によって、年が明ける頃にはそれなりにコントロールができるようになっていた。

「もうお昼におもらしもないし、今日からパンツにしてみようか」

「パンツ…」

「おもらししても大丈夫だから」

「うん…」

いよいよ赤ん坊が終わってしまう。いや、この場合終わるのは幼児の期間か。

入岡がベッドを下り、クローゼットのドアを開けた。衣装ケースの中をゴソゴソしながら、楽しそうな声で言う。

「ちよつとドキドキしちゃうね」

入岡がネットでかわいい柄の下着を購入し、洗濯もしてくれていたことは知っていた。けれどこんなに早く使う日が来てしまうなんて。排尿コントロールができるようになったことは嬉しいのに、

寂しい。

斗真が黙っていたからか、入岡が優しい顔で振り返った。

「数か月パンツを濡らさずに過ごせたら、またオムツを覚えていこうね」

「数か月……」

そんなに長いのか。せいぜい一週間か二週間程度かと思っていた。しかしそれくらいでないと逆トイレトレーニングのしがないのかもしれない。

「うん。斗真くんがトイレでの排泄が当たり前になるまでかな。でもきつとあつという間だよ。パンツに慣れてきたら遠出したりするのもいいね」

「遠出？」

「遊園地に行くとかお泊まりに行くとか。あ、あとは裸でえっちするとか」

「えっ……」

「お、遊園地でもお泊まりでもなく、えっちにだけ反応したな？」

入岡がニヤリと笑う。

「だって……」

裸でセックスなんて恥ずかしい。いつもオムツを外さないままだったから、そこまで羞恥心なく受け入れることができていたけれど。

「ふふ、斗真くん、ちよつとえっちな顔になってる。まだ子どものはずなんだけどな」

「あ、ごめ——」

ダメなのに。でも普段から表情をコントロールできている自信はなかったし、今の入岡にも怒っている気配はない。

「かわいい。俺がたくさんえっちなことしちやつたから、斗真くん、まだ子どもなのに大人の遊びをたくさん覚えちやつたね」

「あ……」

今からトイレに行かないといけないのに、そこがムズムズし始めてしまった。

「斗真くん？」

「……おちんちん、大人になっちゃつた……」

やだあ、ちーしたいのに……とぐずると入岡は隠すことなく顔をとりけさせる。

「かわいい……」

「ンッ——」

ベッドに戻ってきた入岡に押し倒されて唇を塞がれた。ぐりぐりと硬くなった入岡のペニスでオムツを潰されると、それだけで我慢できなくなってしまう。

「あん……やあ……」

ずんずんしてほしい。斗真くん斗真くん、とたくさん名前を呼びながら、大人の男の雰囲気をもとった入岡に快感を与えてほしい。普段の優しい入岡も、セックス中の余裕のない入岡も大好き。

「かわいい。オムツの中で勃起してるのすごいか

わいい」

「やあ……ちー……」

「うん、ちー出せなくて苦しいね」

気持ちに寄り添うような言い方だけれど、入岡は明らかに興奮していた。もっともっと高まってほしい。たくさん求めてほしい。

「うんちはどうかかな？」

「うんちも……」

今は便意は感じていない。けれど「うんちしたい」と言えば、入岡は出しやすくしてくれる。

「ふふ、かあわいい。うんちはもうちよつと我慢してね。先に朝のちーができるようにずんずんしておちんちん治そうね」

「お尻……うんち……」

「ずんずんしたら出しやすくなるよ」

「ン……」

指で広げてもらいながら出すのも好き。でも排便のためという理由付けでもらうセックスも好き。

けれど一番は、ぐずりやわがままを受け入れてもらうのが好き。

「早くちーしたい！」

「ああ、そうだね、ごめんね」

入岡が斗真の体をうつぶせにさせた。けれどこれは普通のオムツ。お尻のところに切り込みはない。

「入岡さん？ アツ……」

入岡が強引にオムツのゴムを裂いた。下に広げられ、お尻を露わにされる。

「やだぁ！ オムツ！」

「おちんちんの先っぽはちゃんとオムツの上にあるから大丈夫。ごめんね、オムツを替えている時間もつたいないから。これで早くおちんちん治してトイレに行こうね」

ヘッドボードに常備されたセックス用グッズ。いつの間にか購入されていたポトルタイプのローションが斗真のアナルを濡らす。

「早くっ……」

「うん。大丈夫、慣らさなくても入るから」

毎日最低二回のセックス。それに加え、日によっては指で広げてもらいながらの排便。もう、斗真のアナルはいつだって柔らかい。

「入れるよ」

コンドームをつけた入岡のペニス。大きくて太くて熱いものが斗真の穴を埋めていく。

「あっ……」

最初は、快感よりただただ安心する。欠けていたものが戻ってきたような安堵。それから一つになれた喜びがやってくる。

「かわいいお尻。ドロドロうんちでぐちゃぐちゃになってるところもかわいいけど、きれいでするんとしているのもかわいいね」

くく略くく

\* \* \*

我が家は天国。イエスキリストもびっくりするほどの楽園。きっと家に招待すれば閻魔大王だってドラキュラだってどろどろになつてしまいうだらう。

朝イチのおねしょチェック。濡れてないと伝えたときの斗真のとろけるような顔。おはようのキスを顔中に降らせた後は量の多い寝起き一発目の補助便座排尿。もちろんズボンとパンツを脱がせるのは入岡の役目。トイレが終わったらミルクを飲ませ、テレビを見せておいてご飯作り。あーんで食べさせ、食後は対面座位の姿勢でソファで抱っこ。斗真はそのまま眠ってしまったので匂いと体温をたつぷり堪能し、起きたら「ちー行きたい」を聞きながらの一度目のセックス。射精疲れで斗真が寝ている間に昼食を準備して食べさせ、午後はぬいぐるみで遊んだり、排便させるべく指でアナルを広げたり――苦痛なのは仕事の時間だけだ。仕事は斗真が寝ている間に一時間程度パソコンの前に座り、なんのかわいげもない株の値動きを見ながらマウスを操作するだけ。その時間をもつたいたない。それだけあればかわいい斗真の全身を丁寧に舐め回すことだってできるのに。

それでも入岡が毎日仕事をしていられるのは斗真との生活がかかっているからだ。斗真斗真斗真。どれほど一緒にいても飽きることはない。むしろ増殖し続ける斗真愛で埋もれそう。

（ああ……今日の斗真くんも最高にかわいかったな……）

ぬいぐるみ遊びの時間、斗真はクオツカを赤ん坊に見立てて横抱きにしていた。聖母かと思った。後光がまぶしくて、写真を撮れる気がしなかった。

入岡が思わず拌みそうになる手を制してクオツカを動かし、その口を斗真の乳首にこすりつけると、斗真は顔を真っ赤に染めながら「おっぱい飲むの？」とクオツカにぎこちない笑みを向けてその刺激に耐え続けた。入岡は脳内で五回抱き、わずかに気持ち落ち着いたところでベッドに連れ込み二回抱いた。

そんな幸せを自分一人の胸に留めておくことなんてできやしなかった。だって、幸せはみんなで分け合うものだ。ラブ&ピース。

「——あれ、今外？」

電話の奥で車の走行音が聞こえた。

『はい、買い物帰りですけど』

「奇遇だね」

入岡が言うと、電話口の向こうで藤田が怪訝そうな声を出した。

『え？』



「俺も買い物のお話をしようと思ってる」

深い吐息の音。そうか、そんなに嬉しいか。

『俺、ただのコンビニ帰りなんですけど。肉まん買って』

「うんうん、わかるわかる。寒いしね、食べたくなるね。おいしいし、俺も好きだよ、肉まん」

しかもあの皮の感じが斗真のオムツのお尻に似ている。そりゃあ比較にならないほど斗真のお尻の方がかわいいしおいしいし魅力的だけれど。

『…：で？ 何の用ですか』

「もうすぐバレンタインじゃない。何あげたらいいと思う？」

斗真は何をあげても喜ぶ。ピンクのハートのおしゃぶりをあげた時は恥じらうように目を逸らし、オムツカバーをあげた時はお尻を見せつけるように左右に振りながら布団の中にもぐっていった。もちろんそのままかくれんぼに付き合っ、たっぷりいちやいちやちゅちゅした。

『…：まだ一か月もありますけど』

しかしおしゃぶりのオムツカバーも必要なものであって、斗真が今以上に生活を楽しむためのもではなかった。だから次は斗真が純粋に喜ぶものをあげたい。

「ぬいぐるみもいいけど、それはわざわざバレンタインのプレゼントにするほどじゃないしさ。恋人になってからバレンタインと一緒に過ごすのは

初めてだし、やっぱり思い出に残る何か――」

『え？』

「ん？」

『恋人になってからは初めてって、どういうことですか』

くく略くく

## 2

「ふふ、かぁわいい……」

入浴の後、入岡にミルクを飲ませてもらう至福の時間。オムツは卒業したけれど、ミルクを飲むのも食事があーんなのも変わらない。つまり変わったのはオムツがパンツになり、トイレを使うようになったことだけ。

それはとてもありがたかった。「もうお兄ちゃんなんだからミルクもなし」なんて言われたら寂しくてどうにかなくなってしまふところだった。

「んく……」

「かわいいね。ミルクおいし？」

「ン……」

甘いミルク。けれどそれ以上に斗真を見下ろす入岡の目が甘くとろけそう。

「かわいい……俺だけの斗真くん……あああ……かわいい……なんでそんなにかわいいの？ おめ

めもお口も全部かわいいね」

でれでれな顔。まるで本物の赤ん坊を見ているみたい。

「ふふふ、かわいい……かわいい……かわいい……食べちゃいたいな……」

「うぐっ、けほっ」

「ああっ！ 大丈夫?!」

入岡が変なことを言うからむせた。体を起こし、背中を撫でてもらいながらゲホゲホと濁った咳をする。

「ごめんね、俺のせい……?」

「い、いえ……」

かわいいという言葉に食べたいという言葉がくつつくことはある。そういう比喻は知っている。けれど入岡の言い方がやけにリアルだったのだ。あと目つきも。

酸素になりたい、血になりたいと言われるのはもう慣れた。けれどまさか食べたいと言われるとは。

「あの、僕を食べて、僕が入岡さんの血になるんですか」

「え、だめだよ！ そしたら愛でられないじゃん……」

「愛でる……」

「うん。毎日かわいい斗真くんをぎゅーっとしてミルクあげてよしよしトントんずんずんして——」

「ずんずんしない」

拒否しすぎだろうか。けれど入岡が求めてくれるのが嬉しくてつい拒否したくなってしまう。だって一度してしまったら、それから一時間はずんずんしたいと言ってもらえない。

「えええ……うん……そうだよね、斗真くんは赤ん坊だから……うん……でもさあ……」

めげないところも好き。そもそも「ずんずんしない」を本気に取られていたらそもそも拒否なんてできないけれど。

「でも、なあに？」

「……えっちな赤ん坊もかわいいよ？」

ちら、とねだるような視線にこらえきれず笑ってしまった。

「ふふっ」

「へへっ」

一緒に笑い合う、何でもない時間。幸せたつぷりで、まるでカスタードクリームの中の海の中にいるみたい。

「あ、ねえ斗真くん、赤ん坊って言えばさ、ホームビデオじゃん？」

「……はい？」

嫌な予感しかしない。

「へへ、カメラ買ったちゃった」

いったい何を撮るつもりなのだろう。気になるけれど、お金は入岡のものなのだから、何を買お

うと入岡の自由だ。とりあえず曖昧に頷いておく。

「ふふ、かわいい斗真くんをいっぱい撮ろうね」

「……恥ずかしいのはや」

「恥ずかしい？　かわいいだけだよ。写真もたくさん撮ろうね」

「……うん」

入岡が喜ぶのなら……とは思うが、できればオムツ姿やパンツ姿は撮らないでほしい。しかし普段、入岡が携帯を構えるのは斗真がオムツ一枚の時が多い。不安しかない。

「あ！」

突然、入岡が何かを閃いたように目を見開いた。

「はい？　何ですか」

「……ううん」

「え……」

何だろう。言いかけて止められると不安になる。さすがに嫌われたのかも、とはもう思わないけれど。

「なに……？」

「あ……ごめんね、あの……嫌だったら嫌って言うてくれていいんだけど、その……斗真くんの子どもの頃の写真、見たいなって。持ってたりする？」

「あ……。あ……」

たぶん祖父母の家にあるはずだ。両親と住んでいた家はもう引き払って、大事なものだけ祖父母

の家に置いている。

「あの、でも嫌だったらほんと、」

入岡はきつと、両親のことを思い出させると思ったのだろう。昔だったら両親の写真を見たら申し訳なさでいっぱいになったところだけれど、今は入岡がいてくれている。

(そういえば話してなかったな……)

今が話す潮時かもしれない。

「……あの、両親が亡くなった時のことなんですけど」

「うん」

入岡が居住まいを正した。大きな手は勇気づけるように斗真の両手をぎゅつと握る。

「僕の誕生日で、それで——」

食事に行くべく小学校に迎えに来てくれた両親の車にトラックが突っ込んだ——事故に遭った時の詳細を話すと、入岡はこれまで斗真に見せたことのないひどい顔をした。まるで今まさに目の前で事故が起きたかのような。

「……そっか、ごめんね、つらいことを思い出させちゃったね」

「いえ……でも今は思い出しても入岡さんがいてくれるから」

「うん。もちろんだよ！ 離れないからね、絶対。ずっと」

きつく抱きしめられ、安心が全身を覆う。

「僕は写真持ってないから、アルバム、送ってくれるように祖父母に電話してみます」

「いいの？」

「僕も見たいから。でも寂しくなっちゃうかもしれないから一緒に見てくれる？」

「もちろん。――あ、着払いで送ってもらってね」

ひとまず頷き、携帯で祖父母の自宅にかける。

（入岡さんからおねだりって珍しいし……）

写真を撮るからこつちを見てとかずんずんしたとか、そういうおねだりはある。けれど他人が関係するようなことは初めてだった。

（……あれ？ 出ないな……）

もう寝てしまったのだろうか。しかし時計を確認しても、時間はまだ二十時半だ。

風邪をひいて寝ているとかではないといいけれど……また明日かけ直そうか、と思った時にコール音が止んだ。

『はい。渋谷です』

祖父の声だった。今までずっと電話の担当は祖母だったのに。どうしたのだろうか。心配になる。

「じいちゃん。僕、斗真」

『おお！ 斗真、どうしたね。何かあったのかい』

「ちよっとお願いがあつて。それより寝てた？ 起こしちやつたかな」

声はいつもと変わらないように聞こえるけれど、もう高齢だ。田舎で畑仕事をしながらの生活は大

変だろう。

『いやいや起きとったよ』

「元氣？」

『ああ、元氣だよ。どうしたね？』

「あのさ、僕の子どもの頃の写真ってある？ たしかアルバムがあったと思うんだけど」

『ああ、あるよ。見たいのか』

「うん。着払いで送ってもらってもいいかな」

着払いで言ったのは入岡だけれど、斗真が払えばいいだろう。斗真自身も見なくなっているし、入岡には生活のすべてを世話になっているのでこのくらいではその補填にもならないけれど。

『ああ……』

きつとわかったと言ってくれるだろうと思ったのに、祖父は少し返事に窮したようだった。

「じいちゃん？」

『いや、あるんだよ。だがどこにしまったか……少し時間がかかってもいいかい』

「ばあちゃんが把握してると思うんだけど」

祖母の家に引越した時、細かいものは祖母が片付けをしてくれたのだ。事故直後のことはあまり覚えていないけれど、それでも祖父母が斗真にとっても気を遣ってくれて、常にどちらかが一緒に過ごすようにしてくれていたことは覚えている。

『……実は、ばあさんが怪我をして』

「え……?!」



頭の中が真っ白になった。怪我の場所や程度、それに原因もそうだし、何より二人きりで生活は大丈夫なのだろうか。

思わず入岡を見ると、心配そうな顔で見つめ返された。声が聞こえているのかもしれない。

「ばあちゃん、どうしたの？ 大丈夫なの？」

『転んで足首をな』

「そんな…骨折ってこと？ 入院してるの？」

高齢者の骨折はただ骨が折れたという問題だけではすまない。骨の修復を待っている間に体力が落ちて寝たきりになるという話を聞いたことがあった。

『いや、筋を痛めたらしい。だから家にいるし大丈夫だよ。だが今は安静にしてるから。じいちゃんがアルバム探すなんて言ったらばあさんもやると言い出すだろう』

「うん…ごめんね、アルバムはいつでもいいから…」

ちら、と入岡を見ると深く頷かれた。無理強いするような人ではないとわかっていたけれど安堵する。

『すまんな。元気になったらすぐに探すよ』

「うん…」

心配だ。それに家事はどうしているのだろう。

(…帰ろうかな…)

引越したことは言っているけれど、退職した

ことは言っていない。言えば心配をかけるかと思っていただけ、今は仕事をしていなくてよかった。

「斗真くん、」

小声で呼ばれ、慌てて入岡を見る。

「明日会いに行こう」

「え……」

『斗真？ どうした』

「あ……ううん、ちょっと待って」

送話口を手で覆い、入岡に視線を戻す。

「入岡さん？」

「明日会いに行こう？ 心配だから」

電話の後で、明日行ってきたもいいか訊こうと思っていたのに。

入岡に頷き、電話に意識を戻す。

「じいちゃん、明日行っていい？」

『仕事だろう？』

「……実は仕事辞めたんだ。いろいろあって……それもちゃんと話すから。ばあちゃん心配だし。

ご飯とかもどうしてるの？」

『辞めた？ そうか……わかった。待ってるよ。

ご飯はまあ大丈夫だ。家にいるから好きな時に帰っておいで』

帰っておいで——そのさりげない言葉に胸がジンとなった。アパートに住んでいる頃はまるで一人ぼっちのような気持ちになっていたのに、今は帰る場所があると思える。そんな余裕を作ってく

れたのは入岡だった。

「うん。ありがと。また明日電話するから」

おやすみと言って電話を切る。

入岡にどう切り出そうか……しかし斗真が顔を見ると、入岡は久しぶりの帰省だねと穏やかな表情で言った。こういう優しくて気配りをしてくれるところが大好き。

「ねえ、本当に俺も行っているの？」

「はい。その……紹介したいし。だめですか」

ハンドルを握る入岡を見る。その表情は不安げだ。

「いやそれは嬉しいって言うか、それならやっぱりスーツで来るべきだったと思うんだよ……」

「スーツ？」

「だって斗真くんの実家だよ？ 愛する斗真くんの実家……お前なんかには斗真はやらん！ とか言われたら……いやでも斗真くんのおじいさんたちがそんな言葉使うかな……けどこんなかわいいことをそう易々と手放すとは思えないし……」

入岡がブツブツとつぶやき続ける。

(……え？……結婚の挨拶……?)

さすがに付き合っているとは言いがらいので、今お世話になっている人、という紹介をするつもりでいたのだけれど。

「え、どうしよう……スーツ屋寄っていい？」

「その格好でじゅうぶんだと思いますけど……」  
シャツの上にセーター、ズボンはスラックス。  
きれいな格好だ。初対面の人にも別に失礼ではな  
いだろう。仕事ではないし。

しかし入岡は不安でたまらないようだった。

「手土産、お菓子だけでいいのかな……おばあさ  
んには花束……？ え、ご両親にもまだ挨拶行っ  
てないのには？ 先におじいさんたち……いやで  
も……」

斗真の声は聞こえているはずなのに、入岡の表  
情は晴れない。ブツブツ続けながらハンドルを切  
る。するとカーナビが「目的地まであと一キロで  
す」と言った。

「え、やばい。どうしよう？ あれだよね、くださ  
いっていうのは物扱いみたいだから言っちゃいけ  
ないんだよね。……え、でも斗真くんは俺のですっ  
て言ったら不快だよね？ でももう俺のなんだけ  
ど……いや斗真くんを物だとは思ってないよ?!」

「……あの、そんなに緊張しなくても……。それ  
ともやめておきます……?」

車を出してもらってしまっているので入岡だけ  
帰すのは申し訳ないけれど、とりあえず斗真が帰  
る時は電車を使えばいいだろう。祖父母の家は離  
れているけれど同じ県内なのだ。

「え、やだよ！ 行っていいなら行きたい  
よ！ っていうかやっぱりちゃんと挨拶したい

し！ え、けどさすがに初対面で付き合ってるって言うのはあれだよね……結婚……したいしするけど……とりあえずここは無難に保護者ですって言う……？ いや祖父母相手に？……うーん……」

今は混乱しているようだけれど、さすがに祖父母の前で赤ん坊ごっこの話なんかはしないでだろう。そこは信用している。けれどそう考えると逆に、祖父母が斗真の失敗談なんかを入岡に話してしまわないだろうかと不安になってくる。

(……ふふ、変なの)

祖父母が入岡を嫌うとかその逆とか、そういう不安が一切ない。たぶん今から会うのが両親だったとしても同じだっただろう。入岡はいろんな人にとにかく好かれる。自慢の恋人だ。

それに――。

「あー！ やばい、緊張する……ここ曲がったところだよね？」

「はい。家の前のスペースに駐車できるので」

今朝の時点で、祖父には入岡と車で行くことを伝えてある。田舎なので土地も広い。楽しみだと言ってくれていたので、場所がないということはないはずだ。

車が角を曲がり、道の先に見慣れた家が見えた。久しぶりの祖父母の家。そして、今は斗真の実家。

入岡がエンジンを切った時、居間の掃き出し窓から祖父が顔を出した。

「じいちゃんだ」

「えっ、あ、わ、やばい、挨拶！ えっと、お母さんの方のおじいさんおばあさんなんだよね？」

「はい。父方は遠いので」

「うん、よし。大丈夫。だんばる」

「噛んでますよ」

「ううう……深呼吸してから行くから先に行つて……」

「はい」

素直に車を降り、祖父の元へ駆ける。

「じいちゃん！」

「斗真！ お帰り。元気そうだね」

「うん！」

「ばあちゃんは？」

「中にいるよ。こたつで座ってる」

中に入る前に——と振り返ると、入岡が斗真の二メートル後ろで紙袋を片手に直立不動で立っていた。

「あの、今お世話になってる入岡さん」

「入岡さん、祖父です」

「こ、こんにちは！」

「いらっしやい。斗真が世話になっているようですみません」

「いえ！ とてもかわいくて……へへ……かわいいです」

もう緊張がとけたのだろうか。早い。

「お、わかつてるね。斗真はかわいいだろう。小さい時なんてね、じいじいいじって後ついて回ってね、」

(…：…：始まった…：…)

祖父は、入岡と同じタイプだ。

「ちよつと、じいちゃんやめてよ、恥ずかしいよ！」

「——なんだ。かわいいだろう？」

「はい！」

「世界一かわいい」

「はい！ 本当にかわいいです」

「はっはっは、素直だね。二人とも入りなさい」

「もう…：…やめてよじいちゃん。入岡さんが困るでしょ」

「え？ 困らないよ？」

「困らないとよ」

「もう…：…」

玄関には回らず居間の縁側から直接入る。祖母にもやり取りは聞こえていたようで、笑っていた。

「ばあちゃん！ 足はどう？ 痛い？」

「おかえり斗真。入岡さんだね、いらっしやい。寒い中すみません」

「いえ！ お怪我なさったと聞いて…：…すみません、久しぶりの家族水入らずなのに」

「いえいえ。遠いところすみません。さあ、おこたに入って」

「失礼します」

長方形のこたつテーブル。長辺に座る祖母の隣に祖父が腰を下ろした。祖母の前に斗真、祖父の前に入岡が座る。

「あの、これ、お口に合うといいんですが」

入岡がようやくかと饅頭のセットをテーブルに置いた。甘いものに目がない祖父が「すまんねえ」と包装を破き始める。

「ちよっと！ 嫌ですよおじいさん。いただきものなのに。丁寧に開けてください」

「どうせ紙は捨てるだろう」

「もう……すみませんね、入岡さん」

「いえ！」

祖父母が入岡の緊張を和らげようとしてくれているのはわかっていた。けれどどう話題に入っただらいのかわからない。

（うう……すみません入岡さん……）

本当は斗真が間に入らなければならぬのに。

「おお、うまそうだね。斗真も好きだろう。ほら」

「あ、うん。へへ」

祖父が箱をこたつの真ん中に置いた。入岡が買ってくれたものだけれど、一緒にいただく。甘くておいしい。

「で、ばあちゃん、どうしたの。本当に大丈夫なの？」

「それがねえ……おじいさんが廊下に脱ぎっぱなしにした靴下に滑って転んだのよ」



「え……」

信じられない気持ちで祖父を見ると、ふいと視線を逸らされた。どうやら事実らしい。

（もしかして、電話で先にはあちゃんの話をしてこなかったのってこれを隠すためだった？）

「もう……じいちゃんてば。いっつも怒られてたのに」

「だから今の生活だって文句なんて言ってないだろう」

「当たり前ですよ！」祖母が目尻をつり上げる。

「病院だつて連れていつてる！」

「当たり前です！」

始まってしまった。しかし二人はこうしてじゃれているだけで本当はとも仲がいい。祖父はいつでも祖母を、祖母はいつでも祖父を一番に考えている。

「あの、入岡さん、気にしないでください。いつもこんな感じなので」

「うん……」

なぜか入岡はじつと祖父母のことを眺めていた。こういうタイプの祖父母が珍しいのかもしれない。

「あの、なんか元氣そうだし今のうちにアルバム探してきます。入岡さんも一緒に行きませんか」

さすがにこの部屋に入岡を置いてはいけない。しかし入岡が返事をする前に、祖父が「俺も行く」と言い出した。逃げたいのだろう。しかしそれで

は入岡をどうするか。

「え……でも」

「じゃあ入岡さんは私とおしゃべりしてくださいか？ 斗真の小さい頃の話をしてあげる」

「えっ、本当ですか！」

食いつきが早い。浮いていた腰はもう座布団に戻っている。

くく略くく

3

「オマルくまだかなくまだかなく」

入岡は朝から落ち着かない。どうやら最短で受け取るには時間指定をなしにするしかなかったらしい。

「あの……」

「うん？」

到着したらすぐに使ってほしいだろうと思い、排尿を我慢していた。けれどももう限界だった。

「ちー出ちやう……」

足をすり寄せながら言うと、入岡が目を見開いた。

「もしかして我慢してた?! ごめんねっ、膀胱炎になっちゃうからちーしようね！」

トイレに連れて行ってもらい補助便座に座る。すぐに尿が飛び出した。快感。

しかし包皮を膨らませながらの排尿もこれで最後かと思うと少し寂しい。けれど、これからは抱っこだ。それにまたオムツになれば今までのような排尿ができる。

突然、入岡の携帯が鳴った。ジョボジョボと排尿の音がしているというのに入岡はその場で電話に出ってしまう。

「はい、入岡です——うん、久しぶり。え？ 誰だろう。名前は？——覚えがないなあ——うん、わかった」

どうしたのだろう。配送業者ではなさそうだが携帯をポケットに戻した入岡が申し訳なさそうに斗真を見た。

「ごめんね、斗真くん。前の職場からの電話で、なんか俺にお客さんが来てるんだって。退職したって言ってもどうしても会って話したいことがあるって譲らないみたいで」

「うん」

それならしかたない。それに丸一日家を空けるわけではないだろう。

「早めに戻ってくるからお留守番お願いしてもいいかな」

普段だったら一緒に連れて行ってくれたはずだ。けれど今日はオマルが届く。すれ違いたくないの

だろう。

「大丈夫。ちゃんと受け取っておくから」

「ほんとごめんね」

ペニスを拭いてもらい、トイレを出る。入岡は斗真を一度強く抱きしめると足早に家を出て行った。

(入岡さんのことを好きな人とかじゃないといいけど……)

ちよつとモヤモヤする。けれどちゃんと信じて待っていないと。

しばらくソファでテレビを見ているとチャイムが鳴った。きっと配送業者だろう。

オートロックを解除すべく立ち上がった時、モニター画面に信じられない顔が映っているのが見えた。

(え……なんで……?)

前の職場の、先輩だった。

しかし斗真が退職して以来、一度も連絡は取っていない。その手続きだって弁護士の上田がちゃんとやってくれたはずだ。そもそも退職してから何か月も経っている。それなのにどうして。

(つていかなんでここが……?)

斗真がここに越してきたことは誰にも言っていない。ということは入岡に用があるのだろうか。

「は、はい」

『……トンマか?』

あちらから斗真の姿は見えていない。それなのにたった一言でわかるなんて。

入岡に電話しないと——けれど仕事の関係で呼び出されている。今すぐ戻ってきてとは言えない。

『お前、ここに住んでたのか』

ということはやはり、斗真がここにいるとは知らずに来たということか。

『開ける』

久しぶりに聞いた先輩の命令口調。指先が震え、頭の中が真っ白になる。

『早くしろ、トンマ』

「あ……」

どうしようと思った時、先輩の背後に配達員が立っているのが見えた。オマルかもしれないし、他の家への配達かもしれない。どちらにしてもこのままぐずぐずしては迷惑をかける。

震える指でオートロック解除のボタンを押すと、画面から先輩の姿が消えた。

どうしよう。どうして先輩が——けれど先輩が用があるのは入岡だ。そうだ、今いませんと言えばよかったのだ。玄関チャイムが鳴ったらドア越しにそう言おう。顔を見たらきつと怖くて何も言えなくなってしまうから。

その時、再びチャイムが鳴った。画面には見慣れた配達員の制服。どうやら配達先は斗真たちの部屋だったらしい。無視してしまおうか。この夕

イミングでは、オマルを受け取る時に先輩にも会ってしまおう。

(でも入岡さん、オマル楽しみにしてるし……)

斗真自身も楽しみにしていた。それに今受け取らないと二度手間にさせてしまおう。やはり今受け取りたい。

再度オートロックを解除してしばらく待っていると、玄関先のチャイムが鳴った。どちらだろう。先が上がってきたのは先輩のはず。けれどもし一階でエレベーターを待っていたのなら同時かもしれない。配達員の方だけは絶対に出なければ。

ドアの覗き穴から外を見る。立っていたのは配達員だった。もしかしたら先輩は他に誰か来ないか警戒していて、配達員に気付いて逃げたのかもしれない。それでも慎重にドアを開ける。

「こんにちは。入岡さんにお届けものです」

「はい。ありがとうございます」

サインをして大きな箱を両手で受け取る。伝票に書かれた中身は育児用品。何度も見たことがあるシヨップ名。やはりオマルだ。箱が大きい割に軽いのはプラスチック製だからだろう。

「いつもありがとうございます」

配達員を見送り、室内に戻ろうとした時だった。締めまりきる前に、ドアの隙間に大きな足が差し込まれた。

「あっ……」

「トンマ」

「先輩……」

いたのか。きつとどこかに隠れていたのだろう。先輩は斗真の両手が塞がっていることを確認すると、強引に玄関に入ってきた。

「や、あの――」

箱を抱えた斗真の姿を、先輩は頭から足先まで視線を往復させた。

「……かわいがられてんだな」

「え……」

モコモコの部屋着のことだろうか。寒がりな斗真のために入岡が用意してくれたもの。

「でもお前が好きなのは違うだろ」

「えっ？」

「それにお前、嘘つきが好きなのか」

くく略くく

5

いつもは二人きりの家。けれど今日はにぎやかだ。

ウーロン茶を片手におつまみのチーズを食べながら、大内が斗真に問いかける。

「斗真くん、大丈夫？ こいつ、徐々に本性を出してきたでしょ」

「えっ」

「もう今って恋人ってよりストーカーとか斗真くんオタクって感じしない？」

「え、いや……」心当たりがありすぎる。

缶ビールをテーブルに置いた三田が真剣な表情を作る。

「こいつに恐怖を感じたら俺に電話して。近づけないようにしてあげる。こいつのやばさに精神が病むような気がしたらすぐに大内に連絡。こいつの存在自体がしんどくなったら富本に連絡ね。消してくれるから」

「消す……」

「……えっ、俺の出番は？」

税理士の西本に入岡以外の三人が返す。

「ないよ」

「ない」

「ないね」

「いやそんな……」

俺にだって何かできることが一つくらい……とぼやく西本を無視して三田が言った。

「で？ 斗真くんはこいつのどこがいいの？」

「えっ……」

大内、富本、西本が順に言う。

「欲望の塊」

「変態」

「気持ち悪い系」



ひどい言われようだ。しかし入岡に気にした様子はない。お土産で富本が持ってきてくれたプチフルを自身のすぐ前に置いて独占し、斗真に食べさせようとする。

「斗真くんの好きなケーキだよ。ほら、あーん」

「え、あの、」

「あ、モンブランよりフルーツの方がいい？  
ちよっと待ってね、ミントどかすから」

「いやそういうあれじゃー」

「はい、ごめんね、お待たせ。あーん」

くく略くく

## 幼児からお兄さん

プレイサイクルに思春期を入れるかどうか——それはとても悩ましい問題で、三日三晩頭を悩ませ続けた。

しかし、斗真は赤ん坊にしてはいやらしいことが大好きだし、甘えた声でセックスを求められるのも心地よかった。

だから赤ん坊——幼児——思春期……のサイクルに決めた。斗真にも話し、受け入れられている。

たぶん、「性教育してあげる」という言葉が効いたのだろう。顔を赤く染めながら、斗真は「お兄さんになる……」と小さな声で入岡に返した。

そしてそれが、一か月前のこと。その後もたっぷり幼児プレイを楽しんだので、次に進む。

「斗真くんはもうお兄さんだから、そろそろいろんなことが自分でできるようにならないといけないね」

「や！」

「とりあえず二か月ぐらいかな。今よりもうちよっとお兄さんになってみよう？」

「やだ！」

反抗されればされるほど滾る。

「お兄さんの期間が終わったらまた赤ん坊だよ。頑張ってお兄さんした分、たっぷり甘やかしてあげる」

「やだ！ 今も！」

「かわい——」慌てて口をつぐむ。「いや、斗真くんはもうお兄さんだから。まずはオマルを卒業して、トイレでおしっこできるようになろうね。最初は俺も一緒に行くし、補助便座も使うから。でもトイレに慣れてきたら補助便座もおしまいにし、一人でトイレに行って、自分でおちんちんやお尻をきれいにするんだよ」

「やだやだ！ うんちもおしっこも抱っこがいない！」

最高に萌える。けれどここは心を鬼にしなれば——自分のためだけけれど。それに斗真だってわざとぐずっているだけなのだ。もしかしたらお試し行動の一部かもしれないが、かわいい。

「でもかっこいいお兄さんな斗真くんも見てみないな。寂しいけどミルクもおしまいにして、あとはオナニーを覚えよう？」

「や！」

「性教育も大事なことから。自分でおちんちんにコンドームをつけて刺激して、一人で射精できるように頑張ってみようね」

「や！ わかんない！」

本当はえっちなことが大好きなのに。斗真は拗ねたふりをしているが目元には赤みがさし、まばたきが増えている。興奮を隠しきれていない。

「もちろんセックスはするよ。正常位とか騎乗位とか、バックもしたいな」

「あ……」

吐息に余韻。やはり本気で嫌がっているわけではない。まだ幼児を引きずっているだけだ。かわいい。

「本当は赤ん坊と幼児とお兄さんを一年ずつって思ったんだけど、さすがにお兄さんを一年するのは長すぎるから一か月ぐらいかな」

「……一か月頑張ったらまた赤ん坊にしてくれる？」

「もちろん。赤ん坊に戻ったらおねしよもしょうね」

「赤ん坊の後は？」

「パンツにするよ。それでオマルを使う練習。オマルに慣れたらまたおちんちんをむきむきしてちーしようね」

「……お兄さん頑張る」

「うん、一緒に頑張ってかっこいいお兄さんになるうね」

——という最強に楽しいやりとりを何度も繰り返した末に始まったお兄さんプレイ。最初は排泄時にオマルがいいとぐずることもあったけれど、トイレのご褒美シール制度を復活させると、次第に自らトイレに行くようになった。

「自分でむきむきもできるようになったし、百点満点！」

「うん！」

「じゃあ次のトイレからは補助便座もなしにしよう」

「リスさんは？」

「リスさんは斗真くんのトイレトレーニングをたくさん応援してくれたから、ちよつと休憩」

「うん……」

「リスさんにまたねってしようね」

斗真は寂しそうだったけれど、それでもリスの頭を撫で、またねと言った。ちゃんとお別れでき

たご褒美のちゅっちゅを後でたっぷりしてあげないと。

トイレが終わったら次はお楽しみの性教育。ベッドに座らせて、ズボンとボクサーパンツを自分で脱がせる。

「これがコンドーム。避妊だけじゃなくて、病気の予防にもなるからちゃんと使えるようになるからね」

実際に斗真がそれを使う必要に迫られることはないけれど。

斗真がおそるおそる中身を取り出す。

「……なんか濡れてる……」

驚きと、嫌そうな感じ。初心うぶな反応。そうか、斗真はコンドームにローションがついていることさえ知らなかったのか。

(ああ……神様……最高)

「今日はこれをお自分でおちんちんにつけてもらいます。使ったことはある？」

「ない……」

「じゃあ、裏表の確認から始めよう」

楽しすぎて口の中によだれが溜まる。話しながら何度も飲み込み、無知な斗真にいやらしい知識を与えていく。

「向きはわかったね。コンドームはおちんちんがちゃんと硬くなってから使うんだけど——」

「僕、おちんちんおつきしない」

「うん…：そうなんだよね。でも少しは硬くなれるから優しく握ってごしごししてごらん」

「入岡さんがして」

わずかに股間を突き出され、今すぐ舐めしゃぶりたい欲望にかられる。しかし拳を握り、頬の内側を噛んで耐える。

「だめだよ。斗真くん、自分でしてごらん」

早く斗真のオナニーが見たい。ごくりとつばを飲み込む。

「だって…：」

「おちんちんいじるの気持ちいいよ。ちょっと触ってごらん」

「うん…：」

あまり乗り気ではないようだ。入岡と知り合う前は自分で処理していたはずなのに。

（つまり、プレイにすっごいのめり込んでくれるってことだ…：）

いや、もしかしたらこれは入岡とのセックスが気持ちよすぎてオナニーなんかじゃ物足りないという意味かもしれない。それなら今日一日かけてたっぷり快楽を味わわせてあげなければ。

「こう？」

斗真が自身のペニスをツンツンとつついた。当然それだけでは勃起などするわけがない。

「おててで包むように握って、動かすんだよ」

「わかんない！」

なんてかわいい甘えん坊だろうか。もうお兄さんだというのに、「オナニーなんてわかんないから教えて!」と言っているのだ。

二本立て、全8万字です。

1の後どうなったかという感じのふわっとした本です。

## 尊すぎる天使2 —サンプル—

©gooneone (うーわんわん)

2022/ 2/ 13

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。